

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02773

研究課題名(和文)近代英語における統語変化 総括

研究課題名(英文)Syntactic Changes in Modern English--Concluding Research

研究代表者

中村 不二夫(Nakamura, Fujio)

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20149496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、博士(文学)の学位を取得した翌月の2016年4月から始まった。以来、4年間と期間延長1年間、都合5年間の受給期間に、概ね「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、目に見える形での研究成果として、1点の著書(単著)、2点の著書(共著)を出版し、5点の国際会議、口頭発表を行った。量産できない学問分野ではあるが、世界に向けて、近代英語の統語変化、特に助動詞do、進行形、助動詞縮約形の歴史に関し、精緻な形ある研究成果を示すことができたと自己評価している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題によって遂行した書籍資料と電子コーパスの両面からの大規模研究は、従来の英語史研究の不備を補って余りあること、以って、世界の近代英語研究に日本発の異彩を放つ研究を大いに発信したと判断される。日本の研究者総覧データベースであるresearchmapの私のページ(<https://researchmap.jp/read0020179?lang=en>)の「Presentations」の項に、本報告書の「5.【学会発表】」に挙げた直近の5つの国際会議の配布資料を、本年2月半ばに原版のまま公開してみた。日増しにアクセス数が増えてきており、本研究に学術的意義が認められることを物語っていると思われる。

研究成果の概要(英文)：This academic project began in April 2016, one month after the present reporter's conferment of PhD. During the ensuing four-plus-one years, he published one single-authored book (A5, 409 pp), wrote the chapters of two academic publications and gave five oral presentations at international conferences in Europe, in accordance with the four-year afore-submitted research plan and goals. The elaborate and large-scale research conducted in the present project seems to be esteemed as a significant contribution to the advancement of the study of the historical English linguistics and philology, focusing on (morpho-)syntactic changes in Modern English, with special reference to the history of the auxiliary do, the progressive form and negative contractions.

研究分野：英語学・英語史(特に近・現代)

キーワード：英語史 近代英語 統語変化 形態変化 助動詞do 進行形 否定辞縮約 数詞

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

平成 24 年から 4 年間、「近代英語における形態・統語変化—否定辞縮約形とその関連構文の発達を中心に」という課題で、基盤研究 C (一般) の複数年研究が承認された。この研究による 2 年半の成果は、著書(分担執筆)2 冊、論文 2 編、国際会議口頭発表 3 回、国内学会全国大会シンポジウム司会兼講師 1 回であった。地道な基礎研究であるため量産はできなかったが、膨大な資料調査から帰結された結論は、国内外の碩学から極めて高い評価を得たと判断される。特に否定辞縮約形とその内包構文の研究は、縮約形の種類によって、たとえば現在形 *can't/won't/shan't* と過去形 *couldn't/wouldn't/shouldn't* の確立の時期に 1 世紀半以上の開きがあるという結論を引き出し、英語史のこの驚きの新事実は、ヨーロッパの聴衆を唖然とさせた。

これに気を良くし、前年度申請を活用し、この課題よりも広汎な近代英語統語法の再構築をしたいと考えるに至った。それが本研究 16K02773 「近代英語における統語変化—総括」である。

2. 研究の目的

紙媒体の日記・書簡資料 130 冊～150 冊、ICAME²に含まれている 11 種類の電子コーパス (LOB, FLOB, Brown, Frown, ACE, Kolhapur; CEECS, Helsinki-DP, ICAMET, Lampeter, Newdigate), BNC, ARCHER3.2、インターネットを通して欧米の大学から集めた伝記・劇・随筆・日記・小説等の電子コーパス (1351 年-1950 年イギリス英語史料 325 点 [104MB]、1750 年-1950 年アメリカ英語史料 410 点 [127MB])、IntelLex Past Masters の中の 1500 年-1950 年に書かれた書簡集 114 冊、*OED*² on CD-ROM を調査史料とし、とりわけ (i) 否定平叙文における助動詞 *do* 使用・不使用、(ii) 疑問文において最後まで助動詞 *do* に抵抗した動詞と構造、(iii) 現在分詞の進行形、動名詞の進行形の歴史に関する研究成果を国際会議で披露することを目的とした。(i),(ii)については、18 世紀英語のみに焦点を当てた Ingrid Tieken-Boon van Ostade (1987) の研究があるが、社会言語学の観点からの研究で、調査史料数は多くない。また、(iii)についての研究は、この構造が英語史上稀有であると考えられてきたことに起因するが、Denison (1985) 以来その実証的研究は放置されたままである。したがって、申請者が本課題によって行う日記・書籍資料と電子コーパスの両面からの大規模研究は、従来の英語史研究の欠落部分を補って余りあること、以って、世界の近代英語の研究に日本発の異彩を放つ可能性を大いに秘めていると判断される。

3. 研究の方法

歴史的異綴りも含め、網羅的にしかも大量に分析し、従来の英語史研究の間に含まれていた分野を掘り起こそうとした。それらの成果を国際学会で発表した。本研究によって行うこのような英語史大規模研究は類例がないと自負している。研究方法の特徴は次のとおりである。

(1) 用例収集にあたり包含と除外の厳密な分析基準を立て、1 例ずつ慎重に吟味しながら用例を集めた。基準によって統計数値は大きく変動するため、それに依拠する結論が英語の史実を歪める恐れがあるためである。また、異なる調査資料に基づいて分析結果を得た他の研究者が、私の分析結果と比較できるようにとの配慮からである。

(2) 近年、電子コーパス利用の英語学が盛んであるため、私もこれを研究に採り入れた。しかし、私は、130 冊、研究テーマによっては 150 冊の紙媒体の書籍資料の網羅的用例調査も行っている。時間と労力を要する過酷な作業ではあるが、これにより、他者の追従を許さない、大規模研究となっている。

(3) 一次資料からの用例収集の結果を厳密な生起数で示すだけでなく、それが歴史的にどのような意義をもつかについても、十分に先行研究を参看した上で詳らかにした。

4. 研究成果

本研究は、博士(文学)の学位を取得した翌月の 2016 年 4 月から始まった。以来、4 年間と期間延長 1 年間、都合 5 年間の受給期間に、概ね「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、目に見える形での研究成果として、1 点の著書(単著)、2 点の著書(共著)を出版し、5 点の国際会議口頭発表を行った。量産できない学問分野ではあるが、世界に向けて、近代英語の統語変化、特に助動詞 *do*、進行形、助動詞縮約形の歴史に関し、形ある研究成果を示すことができた与自己評価している。

日本の研究者総覧データベースである *researchmap* の私のページ (<https://researchmap.jp/read/0020179/presentations?lang=en>) の「Presentations」の項に、本報告書の「5. [学会発表]」に挙げた、直近の 5 つの国際会議の配布資料を、論考として公刊するまでの対応策として、2021 年 2 月半ばに原版のまま公開してみた。日増しにアクセス数が増えてきており、本研究の学術的意義を如実に物語っていると思われる。

ヨーロッパの学会から帰国する際には、本研究課題中もしばしばヘルシンキ大学 VARIENG 研究所で CLMETEV, PPCMBE 等の電子コーパスを使って調査研究させていただくなど、研究の便を図っていただいた。この場を借りて謝意を表す。

(1) 2016 年度

計画書に記載したとおり、2016 年 3 月に授与された博士(文学)の学位論文を、Introduction と Index を充実させ、A5 判 xxvi + 409 ページ、6 章からなる著書(単著)として刊行した。これまでの英語史研究において稀有な語法であると誤解されてきた語法のいくつか、決して稀れでは

なく、従来の研究結果は調査史料に偏りがあったためであるということを実証した書である。
[本報告書5.〔図書〕 参照] 本研究が英語史の新事実の発見や修正に多大な貢献ができることを確信した。

(2) 2017 年度

3年に1回行われる2つの国際会議口頭発表を行った。まず、7月、第5回英語史国際会議 (Colloque Bisannuel sur la Diachronie de l'Anglais – 5、於フランス共和国フランセス＝ラペレー大学) において、130冊の日記・書簡の全例調査を基に、“Affirmative interrogatives without the auxiliary *do* in Modern English [肯定疑問文において最後まで助動詞 *do* に抵抗した動詞と統語的文脈]”と題する口頭発表を行った。助動詞 *do* が定着した近代英語にあってもなお *do* を用いない肯定疑問文が使われることがあったが、それはどのような統語環境であったかを解明した。好評を博した。

次に、8月、第6回後期近代英語に関する国際会議 (The Sixth International Conference on Late Modern English、於スウェーデン王国ウプサラ大学) において、130冊の日記・書簡の全例調査と、*InteLex* を始めとする12種の電子コーパスを分析し、“The ascent and demise of the participial progressive in seventeenth- to nineteenth-century English [17世紀-19世紀英語における分詞の進行形 *being going* の盛衰]”と題する口頭発表を行った。これまで稀な語法であると片付けられていた分詞の進行形が、17世紀と18世紀に頻繁に使われていた点を明らかにし、定説の誤りを正した。構造的には主節に後続する位置で、使われる動詞は *go* が群を抜いていた。単なる *V-ing* の分詞構文には欠けている意味の要素、つまり、進行中の出来事、未来の取り決め、反復等を表出することに存在意義があったと考えられる。そのため、聖職者や高い教育を受けた人々によっても使われた。現代英語に引き継がれなかった理由として、二重の *ing* 形の不快な音調のせいであると指摘した。大変好評を博した。

「研究実施計画」に記したとおり、日記・書簡資料130冊、*ICAME* 第2版に含まれている8つの電子コーパス、*ARCHER3.2*、*OED²* on CD-ROM を調査史料とし、近代英語の統語変化、助動詞 *do*、進行形の歴史について形ある研究成果を残すことができた。

(3) 2018 年度

まず、9月10日-17日、第48回ポズナニ言語学会 (於ポーランド共和国アダム ミッキエヴィチ大学) において、14世紀から20世紀末に至る英語史料 (1億語からなる *BNC* コーパス、各100万語からなる *LOB*, *FLOB*, *Brown*, *Frown*, *ACE*, *Kolhapur*、70点114冊からなる *InteLex Past Masters*、325冊の14世紀-20世紀イギリス英語史料、410冊の18世紀-20世紀アメリカ英語史料、1600年-1999年に書かれた英語史料の集成 *ARCHER ver. 3.2* コーパス等) から収集した1万弱の用例を根拠に、“Ways of expressing cardinal and ordinal numerals in the history of English: From *one and twenty* / *one and twentieth* to *twenty-one* / *twenty-first*”と題し、英語の基数詞と序数詞の歴史について口頭発表を行った。大規模かつ精密な研究発表に対し、聴衆からも、司会を務めた開催大学の学科長からも、身に余るほどの賛辞をもらった。

次に、9月24日-29日、第30回スペイン中世英語英文学国際会議 (於スペイン王国オヴィエド大学) において、“A history of negative contractions: Seeking the reason why *doesn't* and the past-tense group (such as *didn't* and *couldn't*) were established 100-150 years later than the present-tense group (such as *don't* and *can't*)”と題する口頭発表を行い、*don't/can't/won't/shan't* と *doesn't/didn't/couldn't/shouldn't* との間に確立に100年-150年の開きがある理由について口頭発表を行った。この発表も、94,000例を超える膨大な調査に基づいた発表で、不快な3子音連続が後者の確立を遅らせたとする私の発表は、ロンドン大学、オックスフォード大学を始めとするヨーロッパの碩学から高い評価を受けた。本研究課題が国際的にも有意義であることを示した。

上の2つの国際会議の間を活用し、9月19日-22日、ケンブリッジ大学図書館において、著書(単著)を納めるとともに、本研究課題である近代英語統語論に関する研究を行った。

国内では、5月に著書(共著) が、12月に著書(共著) が上梓された。

(4) 2019 年度

2019年5月30日-6月9日、第40回近代・中世英語の国際コンピューターアーカイブ会議 (於スイス連邦ヌシャテル大学) において、1250年-2000年のイギリス英語史料328点と1750年-2000年のアメリカ英語史料410点、*ARCHER 3.2*、*InteLex Past Masters* (OUP から出版された115冊の日記・書簡史料の電子版)、*Helsinki Corpus*、*ICAMET*、*CEECs*、*Lampeter*、*Newdigate Newsletters*、*LOB*、*FLOB*、*BNC*、*Brown*、*Frown*、*OED²* on CD-ROM の全引証のみならず、現代オーストラリア英語 *ACE*、および現代インド英語 *Kolhapur* をも網羅的に分析し、*prevent/stop/save/etc. NP from Verb-ing* 構文の *from* が、イギリス英語とは異なりアメリカ英語で保持されている理由を解明するため、“Explaining American English Usage with Historical British English Usage: Use or Disuse of *from in prevent NP from Verb-ing* and its Synonymous Constructions”と題する壮大な口頭発表を行った。本トピックに関するこのような大規模研究は他になく、大規模かつ精密な研究結果に対し、司会者からも聴衆からも高い評価を受けた。意義深い研究であるとの賛辞をいただいた。

(3) 2020 年度

2020年度に審査の通った2つの国際会議、*The 19th International Morphology Meeting* (第

19 回国際形態論学会、於オーストリア共和国ウィーン経済大学)と The 53rd Societas Linguistica Europaea (第 53 回ヨーロッパ言語学会、於ルーマニア国ブカレスト大学)は、審査に通ったが不本意ながら辞退した。前者は、アメリカ英語において he doesn't know 語法の確立が 20 世紀半ばまでずれ込んだ理由という題目で発表を目論んだが、許可されたのはポスター展示発表としてであった。これ自体厳しい審査に通っており名誉なことではあるが、過去 21 回と同様私は口頭発表へのこだわりが強いため丁重に辞退した。後者は、許可された発表の要録集に掲載されたが、大会間際になり新型コロナウイルス蔓延のせいで対面式会議からウェブ会議に変更する旨の連絡が届いた。その時点では、digital platform, zoom の操作技術が身につけていなかったため、後ろ髪をひかれながらも発表を取り下げた。また、国内においても、広島英語研究会 8 月例会特別講演の依頼を受け承諾していたが、中止となった。

結局、科研費補助事業期間を 1 年延長したことは国際会議発表を増やすという本来の目的を果たすことに結びつかなかったが、これまでの国際会議口頭発表を論文にまとめる絶好の機会ととらえ、黙々と作業した。また、コロナが収束したら、口頭発表のために直ちに渡欧・渡米できるよう、着々と準備を進めることができた点で意義ある 1 年であった。実際、2018 年第 48 回ポズナニ言語学会で発表した序数詞の歴史的变化に関する研究は、2021 年 10 月に刊行される本務校の研究論集に掲載されることとなった。基数詞の歴史的变化に関する研究も、来年 3 月に刊行される本務校の研究論集に掲載されるべく英文校閲が終了している。さらに、2017 年第 6 回後期近代英語に関する国際会議での発表内容も、学会誌に応募すべく英文校閲が終了している。

以上のように、学科長や教務委員という職に忙殺された年もあったが、期間中時間を見つけては助成研究の-effort を果たし、本研究が英語史研究へ大きく貢献できることを示した。英語史研究の中で、電子コーパスを使うだけでなく、紙媒体の日記・書簡の英語も大量に分析した研究は類例がなく、私が行った大規模研究は、主として文学言語に基づいている従来の英語史研究とは一線を画し、その欠落部分を補うことになるであろう。国内外の研究の中で異彩を放つ研究を少なからず世に示せたと判断している。

今後も本研究課題「近代英語における統語変化—総括」を継続しながら、2020 年 4 月より始まった 4 年計画の新規採択課題「1 つの言語、2 つの語法—イギリス英語とアメリカ英語の相違の謎を移民の歴史で紐解く」に研究の中心を移行し、さらなる国際会議口頭発表を重ねながら、英語史の謎を解明し続けたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Fujio Nakamura
2. 発表標題 Explaining American English Usage with Historical British English Usage: Use or Disuse of from in prevent NP from Verb-ing and its Synonymous Constructions
3. 学会等名 The 40th International Computer Archive of Modern and Medieval English (第40回近代・中世英語の国際コンピューターアーカイブ会議、於ヌシャテル大学 [スイス]) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fujio Nakamura
2. 発表標題 Ways of Expressing Cardinal and Ordinal Numerals in the History of English: From one and twenty / one and twentieth to twenty-one / twenty-first
3. 学会等名 The 48th Poznan Linguistic Meeting [第48回ポズナニ言語学会] (於アダム・ミッキェヴィチ大学 [ポーランド]) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fujio Nakamura
2. 発表標題 A History of Negative Contractions: Seeking the Reason Why doesn't and the Past-tense Group (Such as didn't and couldn't) Were Established 100-150 Years Later than the Present-tense Group (Such as don't and can't)
3. 学会等名 The 30th International Conference of the Spanish Society for Medieval English Language and Literature [第30回スペイン中世英語英文学会国際会議] (於オヴィエド大学 [スペイン]) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fujio Nakamura
2. 発表標題 Affirmative Interrogatives without the Auxiliary Do in Modern English
3. 学会等名 Colloque Bisannuel sur la Diachronie de l'Anglais - 5 [第5回英語史国際会議、於フランス共和国フランセス=ラベレー大学] (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fujio Nakamura
2. 発表標題 The Ascent and Demise of the Participial Progressive in Seventeenth- to Nineteenth-century English
3. 学会等名 The Sixth International Conference on Late Modern English [第6回後期近代英語に関する国際会議、於スウェーデン王国ウプサラ大学] (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Ohno, Hideshi, Kazuho Mizuno, and Osamu Imahayashi, ed.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Hiroshima: Keisuisha	5. 総ページ数 xiii + 400
3. 書名 Pleasure of Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura (担当部分 pp. 227-240)	

1. 著者名 米倉 綽・中村芳久編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京: くろしお出版	5. 総ページ数 x + 253
3. 書名 『英語学が語るもの』(担当部分 第5章「He don ' t careの慎ましやかな訴え 否定辞縮約形don ' t と doesn ' tの競合の歴史」pp. 87-108)	

1. 著者名 Fujio Nakamura	4. 発行年 2016年
2. 出版社 Tokyo: Eihosha	5. 総ページ数 xxvi + 409
3. 書名 Unveilling 'Rare' Usages in the History of English [英語史における「稀有な」語法の発掘]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------